

奄美群島日本復帰に関する郷土素材リーフレット

【小学校用】

令和5年度大島教育事務所

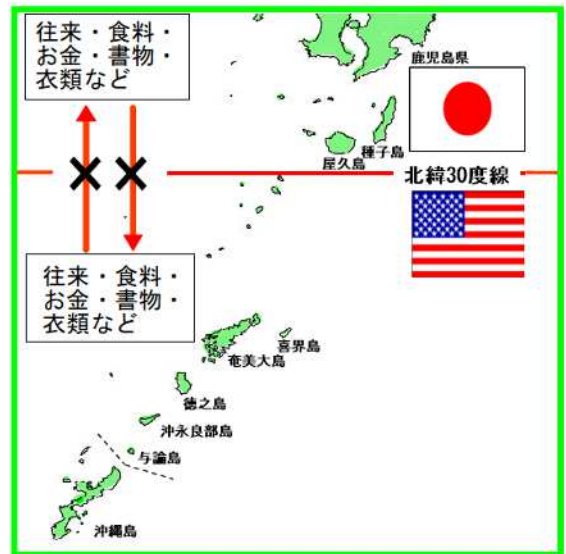
12月25日を忘れないでください

令和5年12月25日は、奄美群島が日本に復帰した70周年の日です。70年前、いったいどんなことがあったのでしょうか。私たちは、先人の思いを受け継ぎ、これからの社会をどのようにつくっていくべきでしょうか。



I 何があったのだろう

1945年（昭和20年）、日本は太平洋戦争で降伏し、北緯30度より南の奄美と沖縄を含む南西諸島と小笠原諸島は、日本本土と切り離され、アメリカ軍に統治されることになりました。島民は自由を奪われ、不便な生活を送ることになりました。



※ アメリカ軍の統治：アメリカ軍に土地や人民が支配されること

II アメリカ軍の統治下での人々のくらしは、どのようなものだったのだろう

奄美群島は日本本土との自由な往来や連絡、送金などが禁止されていた。

【食べ物】

- 食料が不足した。
- アメリカ軍の支給する食料品が約3倍に値上がりした。
- サツマイモ、ソテツのおかゆ、木の実、果物、魚介類などで空腹をしのいだ。

【お金・仕事】

- 一日の労働賃金は、米2升分（現在の約1,000円）
- 仕事があまりない。
- 沖縄への出稼ぎが増え、奄美の活気がなくなった。

当時使われたお金（アメリカ軍発行）

【教育】

- 教科書、ノートなし
- 黒板、机、いす不足
- 学校は、そまつなかやぶき屋根造りの学校も多かった。

【その他】

- 黒糖、大島紬の生産量の低下
- 日本の新聞や雑誌をよ読むことができなかった。

極度に不便な生活

現在の私たちの生活と比べて、どんな違いがあったのだろう。また、不便な生活の中で人々はどのようなことを思ったのだろう。



III 復帰運動は、どのように行われたのだろうか

協議会の結成

「奄美大島日本復帰協議会」が結成され、議長に徳之島出身の泉芳朗氏が選ばれました。

署名運動

約3か月で当時の14歳以上の島民の99.8%が署名しました。

断食祈願

泉議長は「日本復帰の悲願を断食で世界中に訴えよう」と、名瀬の高千穂神社にこもって5日間の断食を行いました。

復帰運動

※ 断食：修行や願かけのため、しばらく食べ物を口にしない命がけの行動

1952年（昭和27年）、アメリカの駐日大使が「奄美群島の日本返還は、沖永良部島と与論島を除こうと考えている」と発言したと報道されると、両島はもちろん各地で復帰運動がさらに強まりました。



泉 芳朗 議長



断食祈願に集う人々（高千穂神社）



復帰を求める島民たち

泉議長や群島民は、どんな思いで、復帰運動や断食祈願を行ったのだろうか。



IV 奄美群島日本復帰までにどのようなできごとがあったのだろうか

- 1941年（昭和16年）12月8日 太平洋戦争始まる。ハワイの真珠湾のアメリカ軍港とマレー半島のイギリス軍を日本軍が攻撃する。
- 1945年（昭和20年）8月 広島・長崎に原爆が投下される。日本は8月15日に降伏し、終戦を迎える。
- 1946年（昭和21年）2月2日 奄美群島・沖縄などが日本から切り離され、アメリカ軍の統治下に置かれる。
- 1951年（昭和26年）2月14日 奄美大島日本復帰協議会が結成され、議長に泉氏が就任する。群島内で署名運動を開始する。わずか3か月間で、14歳以上の99.8%が署名する。
- 8月1日 泉議長が名瀬の高千穂神社で5日間の断食を決行する。多くの市民も参加する。
- 8月7日 11人の命がけの密航陳情団が枕崎などに上陸する。その後、東京で国会・政府などに島の窮状を説明し、大きな反響となる。
- 1952年（昭和27年）9月 沖永良部島と与論島は返還から除くという情報が流れ、復帰運動がさらに強まる。
- 1953年（昭和28年）8月8日 日本を訪問したアメリカのダレス長官が「奄美群島返還」の声明を発表する。
- 12月25日 復帰運動が実を結び、奄美群島の日本復帰が実現する。

V 先人の生き方から、どのようなことが学べるのだろうか

1953年（昭和28年）12月25日午前0時、奄美群島は正式に日本へ復帰しました。日本でありながら日本ではなく、日本人でありながら日本人でなかった苦難の8年間が終わったのです。

泉議長を中心に、日本復帰を成しとげたこの運動は、暴力的に対立することや破壊活動を行うことなく、「奄美島民は日本人だ。奄美は日本だ。奄美を日本に戻してほしい。」と平和的に熱く訴え続けた無血革命でした。

※ 無血革命：話し合いなどの平和的手段で達成される革命

「日本復帰の日のつどい」の様子



復帰運動が行われた名瀬小の石段に立つ児童



式典に参加する児童



私たちは、過去の歴史や先人の生き方を学ぶことによって、先人の思いを受け継ぎ、現在から未来につなぎ、これからの社会をどのようにつくっていくべきでしょうか。

【参考資料】「奄美群島日本復帰運動」「命がけの密航」（編集：農原弘久 発行：大和村教育委員会）

【写真引用】「復帰前年、市長時代の日記など収録」（2022年12月22日 奄美新聞社）、奄美市ホームページ